

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：37503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720154

研究課題名（和文）ベトナム中部高原地方のエデ語の記述と言語生活状況に関する研究

研究課題名（英文）A study on Ede Language in Central Highland of Vietnam

研究代表者

田原 洋樹 (TAHARA HIROKI)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・専任講師

研究者番号：60331138

研究成果の概要（和文）：

ベトナム中部高原地方で行われるエデ語に関して、音声調査を実施して、音素目録を明らかにした。次いで、語彙調査、文法項目のリスト化を実施し、エデ語の全体像に迫った。また、マスメディアにおけるエデ語の使用状況、初等教育段階でのエデ語教育の実態を検証した。

研究成果の概要（英文）：

Based on the on-site research of Ede phonetics, this project shows the Ede phoneme inventory, basic vocabulary and grammatical essentials of Ede. The project also focused on sociolinguistics aspects of Ede such as Ede in the mass media, Ede in the primary education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：エデ語、言語政策、少数民族の言語

1. 研究開始当初の背景

ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）は、人口約8200万を擁するインドシナ半島最大の国家である。政府は「民族識別工作」を実施、54の民族を公認しており、多民族多言語国家である。多民族国家ベトナムにおいて、民族間の融和は国家存立の生命線である。独立・建国の父であるホー・チ・ミンは生前に民族の融和と共生を強調し、独立宣言や憲法にも各民族の権利と義務の平等が盛り込まれている。しかし、すべての民族に平等や権利・義務が法律上は保障されているとしても、実際には発展が局地的に進んでいる。86年12月に、政治は社会主義、経済は市場経済を指向する「ドイモイ改革」路線が採択されて、地域間や民族間の経済力には差がつき、貧富格差は広がる一方である。人口の約88%を占め、唯一の政党であるベトナム共産党と政府の実権を掌握しているのがキン族（狭義のベトナム人）である。キン族の言語がベトナム語であり、日本におけるベトナム語研究という場合には、このキン族の言語の研究を指してきた。

ベトナム政府は民族政策の一環として、少数民族の言語への文字の付与、ベトナム語教育の推進を柱に、80年に言語政策（政府53号決定）を打ち出した。しかし、この決定が発効してから四半世紀が経過し、この間の国際情勢の変化、さらにベトナム国内の経済状況・文化の変化と53号決定には大きな乖離が見られる。

公定54民族のうち、エデ族は人口約18万人を擁し、中部高原地帯4省に居住する少数民族のうちでは比較的多勢である。エデ語はラテン文字による文字体系を持ち、初等教育でのエデ語教育、テレビおよびラジオのニュース番組があるなど、少数民族言語として

は安定した地位を得ているようにも見える。しかし、より精緻に見ると、喫緊の、かつ言語学的に興味深い課題を内包している。

2. 研究の目的

エデ語は、接辞や三重子音などの特徴を有するオーストロネシア語族の言語で、18万余の話者人口を擁する。しかし、公用語であるベトナム語による教育、ベトナム人との通商や通婚により、エデ族の母語能力が低下し、エデ語による言語生活の営みや口承文芸の維持に危機感が生じてきた。また、ベトナム語との言語接触で、元来は無声調のエデ語が声調化の兆しを見せている。本研究ではエデ語のフィールド調査を実施して、音韻構造を明らかにし、語彙リストの作成を通じて形態論的過程を考察する。エデ語全般にわたる記述研究を展開すると共に、言語生活そのものの記録を行うこととした。

3. 研究の方法

ベトナム語を媒介言語としたバイリンガル・アプローチによる。研究の方法と流れは以下の通りである。

『アジア・アフリカ言語調査表』を利用した語彙調査⇒暫定的な音素目録の作成⇒音韻的分析

また、母語話者居住地区での短期滞在により、地域メディアや学校教育におけるエデ語の使用状況について参与的観察を試みる。

4. 研究成果

(1) エデ語はオーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派に属する孤立語である。語彙レベルでは、djié（死ぬ）→ mdjié（死

なせる：m-は使役の接辞)、kal (戸を閉める) →knal (門：-n-は「道具」を表わす接辞) のようにオーストロネシア語族の他の言語と同様に接辞機能を見出すことができる。

(2) オーストロネシア語族に属する言語として、接辞機能を有していたことが見て取れる一方で、現在ではかなり脱落しており、語形成の観点から興味深い。なお、数詞などの基本語彙において、現代インドネシア語に類似する点が縷々あり、これをエデ族の知識層が正確に認識していることは特筆すべきである。

(3) エデ族は中部高原の少数民族の中でも人口、経済力、現政権との政治的力学において優位にある。しかし、通商や通婚が進み、エデ語話者は確実に減少している。エデ語の識字率低下も、エデ族知識人の間では問題となって久しい。さらに、口承文芸の担い手も激減しており、エデ語の言語生活は既に危機的である。語彙収集・分析、音韻構造解明と合わせて、「エデ語による生活」を確実に記録することも必要になる。そこで、今次研究期間に、現地での調査期間中にエデ語の民話や口承文芸に接した時は、これを収録しておき、音声情報として現地住民にデータを提供してきた。今までの予備調査で、エデ族の老人は言語や口承文芸が生命力を失っていることに強い危機感を抱いているのが分かった。調査先で「これから昔話を語る。意味はいずれ教えるから、今日は音だけを残しておいてくれ」と20分の民話を語った老人がいた。当方の言語学的興味関心からのみ一方的に調査するのではなく、現地コミュニティへの還元も視野に入れておきたかった。

(4) また、学校教育の現場におけるエデ語をはじめとする少数民族語の取り扱い方、少数民族の「言語権」について、最新事情のヒアリングを行った。危機言語の記述、保存

に関するベトナム国内の取り組みは万全とは言えず、他方でコミュニケーションのベトナム語化が急速に進んでいる。エデ語の場合は民族語教育、民族語放送が実施されているので、まだ「マシ」というのが現実である。当事者であるエデ族の、長老たちは民族語保存に熱意を持っているが、彼らとて具体的なアクションをとれないところに、本件の難しさがある。

(5) 現在のように、明確な言語政策がない状態が、少数民族の言語にとって、未来永劫にとはいえないが、少なくとも現時点では決して悪いことではないと考える。強烈な「ベトナム語化」を進めるとなれば、ベトナム語や英語を運用できることこそが豊かさに直結する以上、政策が想定するよりも速いスピードでベトナム語化が進み、少数民族言語の危機はいよいよ深刻化する。ただ、長い間54民族とされてきたベトナム国内の民族数だが、最近の政府調査団の作業により、62から64くらいに見直されるようでもあり、合わせて言語実態についての調査も近々に始まるようである。他方で、中部高原での民族暴動のように、政府に対して民族問題を塩漬けにさせない、さりながら過激な政策を取らせづらいような出来事も発生している。つまり、現在は少数民族の多言語生活と国家の言語政策はいわば「踊り場状態」にある、これこそが、ベトナムの少数民族言語研究や言語生活観察を今やることの重要性であり、面白さではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

田原洋樹、白水社、『くわしく知りたいベトナム語文法』、2010、227頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田原 洋樹 (TAHARA HIROKI)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学
部・専任講師

研究者番号：60331138

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし